

We Love Circle

長崎大学

落語研究会



2007年夏、市内のホールで行われたの寄席の様子。2年生から4年生が単独で落語を披露し、1年生はそれぞれ自作のコントを披露するのが定番となっています。



和気あいあいとした雰囲気な落語研究会。



噺の役になりきったメンバーの予想外の仕草に、どっと笑いが起ることも。

あなたの笑いを頂戴します！

演者の巧みなしゃべりや身振り手振り、そして聴き手の想像力で噺の世界が広がる落語。室町時代から始まったとされるこの伝統芸能の楽しさを地域に伝えようと寄席に取り組んでいるサークルが長崎大学にあります。

発足して36年目を迎える長崎大学落語研究会では、現在23人の学生が年2回行われる寄席に向けて日々練習を重ねています。落語の魅力はなんといっても何人もの役を一人で演じ分ける演者の技巧。演者の演じ方一つで噺の内容に深みが出たり、聴き手の引き込まれ方に違いが出るのだとか。そこが落語の面白さでもあり、難しい部分でもあると部長の村山さん(環境科学部3年)は言います。

特に噺のオチが既に決まっているような古典落語は、どこに自分のオリジナルティを入れて笑いを起こさせるかが重要なポイント。練習ではメンバー全員でお互いのでき具合を評価し、それぞれが持つ「良さ」に磨きをかけていきます。ここで自分の意外な一面を知るメンバーも多いとか。普段はおとなしいのに、舞台上で落語を語ると、性格が明るく一変するメンバーもいるそうです。噺の役になりきっている姿を見ると、

演者の巧みなしゃべりや身振り手振り、そして聴き手の想像力で噺の世界が広がる落語。室町時代から始まったとされるこの伝統芸能の楽しさを地域に伝えようと寄席に取り組んでいるサークルが長崎大学にあります。



長崎大学落語研究会部長
村山 勇太さん
(環境科学部3年)

「古典落語には長崎にゆかりのある話があり、地元の人なら特に親しみやすいのではないかと思います。地域の方に少しでも落語の楽しさを伝えていけるよう、また、この活動の歴史を絶やさないよう、地道ではありますが寄席の活動を行っていききたいと思います。」

「私たちが、『落語は単なる話芸ではなく、舞台上で演技をすること』をモットーに活動しています。例えば、表現のバリエーションを増やすため、話をするときは自分の表情を意識するなど、普段から気を配っていますね。」という村山さん。最近では、いろいろな表情や仕草を落語の舞台上で演じられるようになりました。また、明るい表情が普段の生活のなかで自然と出てくるようになり、対人関係に幅ができたことも落語のおかげではないかと感じているそうです。落語を通して自分の内面を磨くことができたのは、意外な収穫だったと村山さんは言います。

現在は、毎年行う寄席の他、地域の老人ホームや老人会のイベント、小学校の国語の授業の一環として落語を披露する活動も積極的に行っている長崎大学落語研究会。一席一席にメンバーの工夫が盛り込まれた落語で、あなたも笑いのツボにはまってみませんか？